



R.シュトラウス:仕立屋のポルカ

1864年ミュンヘンに生まれたリヒャルト・シュトラウスは、4歳から父の友人にピアノの手ほどきを受け、6歳になった1870年にはさっそくピアノで作曲を始めた。この可愛らしいポルカはシュトラウス最初期の作品である。

F.シュトラウス:ノクターン op.7

シュトラウスの父フランツは、ミュンヘン宮廷管弦楽団の名ホルン奏者だった。厳格な父で、モーツァルトやハイドンなどの古典派音楽の信奉者であったため、リストやワーグナーに対しては否定的な見解を持っていた。作曲家としては、ホルン奏者にとって重要なレパートリーとなる作品を残している。

R.シュトラウス:ホルン協奏曲 第1番

シュトラウスは生涯に2曲のホルン協奏曲を書いているが、その2曲の間には約60年の開きがある。第1番は父フランツの60歳を記念して1882年に着手され、翌年完成した(作品の原題は「ヴァルトホルンと管弦楽のための協奏曲」)。初演はピアノ伴奏の編曲版で行なわれた。比較的小規模な3楽章構成となっており、楽章間は間断なく演奏される。

R.シュトラウス:オーボエ協奏曲

フィラデルフィア管弦楽団の首席オーボエ奏者だったジョン・デ・ランシーの求めに応じて1945年に書かれたシュトラウス最後の器楽協奏曲作品である。晩年にもかかわらず初期の音楽に回帰したような瑞々しさと、精神の若さすら感じさせる。全3楽章構成で、楽章間は切れ目なしに演奏される。